

二葉亭四迷の『浮雲』論

——『浮雲』という題意の問題をめぐる——

鄭 炳 浩

一 はじめに

日本文学史における近代小説の嚆矢とされる二葉亭四迷の『浮雲』は、登場人物の構成という側面からみると、比較的簡単なかたちから成っている。すなわち、文三、お勢、お政、本田昇といった、たった四人の人物が主に登場するだけであり、彼らが見せる葛藤も、文三と他の登場人物がお勢を間に置いて競い合う恋愛の物語といえるのであって、概括してしまえば、あまりにも図式的な構成を取っているといわざるをえない。

しかしながら、図式的な恋愛物語とはいえず、そこには明治近代初期の様々な時代的背景が深く浸透していることが注意され、そのことがむしろこの小説が現在においても読む価値を失わない理由となっている。その時代的背景なるものを二葉亭の言葉を借りて表現すれば、「当時の日本の青年男女の傾向」とりわけ文三とお勢の「恋愛」に対する行動と意識、あるいはその発言を通して「日本文明の裏面を描き出し」た物語なのである。

だとすれば、本作品における「日本文明の裏面」とは、具体的にどのような内容が作品内に彫りつけられているのか。二葉亭は、『浮雲』には一貫した中心思想が存在していないと指摘しながらも、次の三つの思想を表出しようとしたと言及している。すなわち、まず、「官尊民卑」を、次には「新思想と旧思想」を、そして第三には、「終の方なんぞは『浮雲』という題意を奈何してあらはさう」としたものである。ただこの二葉亭の言説を『浮雲』内の事実としてみることが許されれば、「官僚制の批判」や「新旧の対立」というテーマが作品内において何を指し、また何を意味しているのかは比較的明瞭である。しかし『浮雲』という題意となると、それほど簡単には答えられないといえる。この『浮雲』という題意に関する研究は、関良一が『浮雲』と言う題は、おそらく、直接にはお勢を象徴し、彼女が、他の四人のつ

くる対角線の交点に位置しつつ、その四方に牽引され、漂へる雲のごとくその線上を往き来してさだまらない状況を意味している」という平行四辺形説を提起して以来、様々な論考で追求されてきた。たとえば、越智治雄は、「浮動する不安定な状況と、その中にいる作者自身の不安とが一体になって「浮雲」という題意が生きてくる」と述べ、十川信介は「彼らの不安定で浮雲い言動に由来し、日本の将来危うしの意がこめられているのであろう」と解釈している。

ところが、このような論考が代表する研究史の中で、関良一の場合は、作品世界を構成していない二葉亭の構想案まで作品世界の一部分として取り扱っているという、作品論としては逸脱と呼ばざるをえない欠陥を持つており、その「浮雲」という題意」に関する解釈のもとになっている平行四辺形説は、今ではその弱点が多くの論考で指摘されている。それに對して、十川信介や越智治雄などの解釈は、作品全体の構造やテーマと「浮雲」という題意がどのように噛み合って、作品内の世界に構造化されているのかといった、作品の具体的な分析よりも、「浮雲」という言葉そのものの語彙的な意味という、これも外部の語彙を通して作品の世界を分析しようとする方法に終始している。さらに、そのような研究では、作品の中のいくつかのところで登場する「浮雲」ないし「雲」という言葉が、どのようなイメージとして使われているのかに對する考慮も払ってはいないのである。

したがって、本稿は『浮雲』における最も中心的な事件といえる文三とお勢の恋愛物語に基づいて「浮雲」という題意」に焦点をしぼることにする。とりわけ、いくつかに分節化されている本作品の中心思想として、「浮雲」という題意」が作品の後半部でどのような意味を生み出して、作品全体の構造やテーマと「浮雲」がどのように噛み合うことで作品内の世界と関連しているのかといった、「浮雲」という題意」のありように関して考察することにする。

二 二つの世界——近代的空間の物語

『浮雲』という作品の内部世界は、同一の空間の中でたった四人の登場人物たちが思惟し行動する物語であるが、その内部世界は、基本的には二つの世界に分けられるという構造をとっている。まず、第十九回の叙述時点において、現在と過去の世界とは、次のように異質の雰囲気支配する世界として描かれていることがわかる。

が、（現在は、過去の…引用者注）その温な愛念も、幸福な境界も、優しい調子も、嬉しさうに笑ふ眼元も口元も、文三が免職になってから、取分けて昇が全く家内へ立入つたから、皆突然に色が褪め、気が抜けだして、遂に今日此頃の此有様となつた……

今の家内の有様を見れば、最早以前のやうな和いだ所も無ければ、沈着いた所も無く、放心に見渡せば、総て華かに、賑かで、心配もなく、気あつかひも無く、浮々として面白さうに見えるもの、熟々視れば、それは皆衣物で、裸体にすれば、見るも汚はしい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊で有る。以前人々の心を一致した同情も無ければ、私心の垢を洗つた愛念もなく、人々己一個の私をのみ思つて、己が自恣に物を言ひ、己が自恣に挙動ふ、欺いたり、欺かれたり、戲言に託して人の意を測つてみたり、二つ意味の有る言を云つてみたり、疑つてみたり、信じてみたり、——いろいろさまさまに不徳を尽くす。

（二四五—二四六頁）

すなわち、『浮雲』の空間となつてゐる園田家は、文三の免職という事件をきっかけに、全体の雰囲気に変化がもたらされることになる。しかも、作品の屈折はこのやうな園田家の雰囲気の変化のみではない。むしろその変化は『浮雲』の主要登場人物である文三とお勢という男女の關係変化と正確に照応している。結論的にいって、その關係変化といふのは、文三のまなざしから見た場合、お勢が文三にとつては、それまでの求愛対象から、どうしても因習から救い出さねばならない救済対象へと一転する様相を呈してゆくようになることを指している。

『浮雲』における前半の中心事件は、文三のお勢に向つての求愛だといえる。というのは、この作品の表層においては、『お勢との恋を維持しようとする文三』と『このやうな文三の希望を制約し、むしろ文三と反対の方向を志向して行く人物』とが葛藤してゆく対立の展開として把握できるからであり、このやうな相反する男女の葛藤と相互作用によつて事件が展開してゆくからである。しかしながら、作品の後半部に至ると、恋をめぐつて相反する考え方と行動をとる文三とお勢の葛藤は、それ以上の意味を持つことはなく、文三がどのやうにしても自分を背いたお勢を含めて園田家を救わねばならないという救済意識が作品の全面に出て、内部世界を維持させてゆくことになる。すなわち、作品の世界は、前半部の求愛の物語から、後半部の救済の物語へと屈折して展開してゆくのである。

とすれば、この『求愛の物語』から『救済の物語』へと屈折してゆく『浮雲』内の世界にとつて、文三とお勢は、どのやうな成長の段階を踏んできたのであろうか。そしてそれとともに、作品の現在という時点において、彼らの感情と行動は、どのやうな時代的背景を孕んでいるのであろうか。このことを分析することが当面の課題だが、そのためにはまず、彼らが成長過程に受けた教育内容と、二人の恋愛が表象する時代的背景に眼を配る必要があろう。というのは、『恋愛』

という観念はすぐれて歴史的な所産であつて、明治近代にあつては、〈恋愛〉はまさに教育の対象だつたからである。

まず、文三とお勢が教わつたと推定される当時の教育内容について考察することにする。文三の場合は、作品をみると、漢学塾を除いても二回にわたる公的教育を受けている。すなわち、「文三の十四という春、待に待た卒業も首尾よく済だ」という部分、それにまた「給費が貰へる」学校に「入舎」して「遂に多年螢雪の功が現れて一片の卒業証書を抱い」たという部分がその事実を証掟立てる。お勢の場合も、「小学校を卒業した頃」というように当時の公的教育を経験している。お勢にとっては、そののみならず、「私塾」などで漢学と英学を学び、作品の現在においては、英語教習をも受けている。こうした彼らの教育と関連して関心が惹かれるのは、この二人が受けた当時の教育は、明治四年の文部省設立と明治五年の学制発布、そして明治十二年の教育令発布につながるといった、近代的な学校教育制度が導入されて以降のものだということである。

『浮雲』における現在という時点は、文三が二十三歳に当たる明治十九年である。それから逆算すると、文三が小学校を卒業した時点は明治十年（文三の十四歳）であり、お勢が小学校を卒業した時点は明治十七年（お勢の十八歳）ということになる。それゆえ、小学校に在学していた時期を基準にしてみると、文三は学制発布の時期、またお勢は教育令発布の時期に重なることになる。ところが、このような近代学校制度の整備は、日本が欧米列強に伍するために、文明開化と富国強兵の実現といった、近代日本の旗幟を鮮明にする一環として実施されたものであった。その中でも特に学制発布以降には、「欧米の先進諸国の文化が尊重され（中略）近代学校の発足にあたって教科書の面でも、これら先進諸国の書物を翻訳・翻案したものが広く用いられて、（中略）それらの多くは西欧文化を内容とする啓蒙書の類」であつたということが留意される。

しかしながら、明治初期にこのように近代的（＝欧米的）学校制度が整備されつつあつたといつても、今日のように、大部分の国民が初等教育を受けるまでには至らなかつた。文三やお勢が小学校の全課程を修学したというのは、当時の同輩の青少年の中でも、ごく稀な場合に属する。⁽⁷⁾それはともかく、文三のほうは小学校卒業後にも、引き続き官立学校に進学し卒業しており、お勢の場合も私塾や英語教習所などで漢学とともに西欧の文物に関することを学習している。それとともに、お勢が私塾から家に帰ると、今度は文三から英語を教わっているという点は注意に値する。

右のような事実は、本作品の二人の主人公が明治初期に欧化熱とともに積極的に導入された、近代的な国民教育を通じ

で成長した人物であるということを知らせてくれる。さらには当時としては、まだ一般化されたとはいえない、西欧化（「近代化」）の空気を呼吸した人物として措定されているということになる。

この小説のストーリーは、基本的には恋愛の物語であることは前で述べた。とすれば、当時の近代的教育の享受者である文三とお勢は、いかなる恋愛意識をもっていたのかということが当然注意される。文三とお勢の成長来歴や二人の恋愛の感情が芽生えていく過程を描写した第二回と第三回の小題目として、「風変わりな恋の初峯入り」という言葉が附されている。ここで印象深いのは、作者が文三とお勢の初恋を、当時の修験道の用語である「大峰入り」に喩えたということと、二人の恋を当時としては珍しい「風変わりな恋愛」であるという指摘である。「初峯入り」とは、修験道の初心者が始めて修験の霊山を抖擻（＝苦行）する修行のことであるが、そのことはいうまでもなく男性だけで、女性にはタブーの修行とされた。したがって、ここでこの「初峯入り」という言葉が用いられていることは、初めての経験、苦難な体験、女性にとつては禁忌の犯し、といったような意味が含意されている。それゆえに、二葉亭は少なくとも、前近代の男女関係にとつては「禁忌」とされたであろう、新タイプの「恋愛の物語」を活写しようとする意図を抱いていたといえるのではなからうか。

『浮雲』の第二回には、文三とお勢の間に恋愛感情の芽生えていく過程で「折節は日本婦人の有様、東髪の利害、さては男女交際の得失などを論ずるやうになる」という場面が出てくる。ところが、ここで取り上げられている「日本婦人の有様」や「東髪の利害」や「男女交際論」などは、いずれも当時、文明開化の風潮とともに、啓蒙雑誌などで盛んに議論されたテーマであった。その中でも、「男女交際論」という問題は、『女学雑誌』が、男女の精神的な交際を積極的に勧めるべきだと一応は提言しながら、その方法としては、様々な男女の集まり（会）を創るべきだという『時事新報』の論を紹介し、「人間はもと交際の動物にして女も亦た人間なれば其の仲間に交際の大切なことは明白にて今更に同意を表するまでもなし然れど今ま男女を交際するに至りては深くその仕組なるものに注意せざるべからず」という意見を開陳している記事からみることができるように、新たな「恋愛」のありようを模索しようとする動きが起こりはじめたといえるであろう。

このような新たな「恋愛」のありかたの模索という胎動が、この小説の世界に一つのモチーフとして採り入れられ、文三とお勢という二人の人物にその感情にしたがって行動させ考えさせようとしたのがこの『浮雲』の男女の世界なのであ

る。お勢の場合、自分は「西洋主義」の本当の理解者であることで、「男女同権」に對して言及し、そして西洋主義の理解者だと信じた友人たちが「両親に圧制せられて、みんなお嫁に往ったりお婿を取ったりして仕舞った」という前近代的な男女関係（旧習）を批判し、自分は「二千年来の習慣を破る」と文三に言いかける部分に、当時胎動しつつあった新しい戀愛觀念の浸透をうかがうことができよう。お勢の相手である文三の場合も、彼の恋敵である本田昇とは對照的に、お勢との関係の言葉を使い分けている。すなわち、第一回と第十回で、本田昇は文三とお勢の関係を指して「情婦」「情夫」と呼んでいるが、文三の場合はいつも「愛」という言葉を使っている。その上、文三は「相愛は相敬」することであり、「相愛する二ツの心は一体分身で孤立する者でもなく（中略）愉快適悦不平煩悶にも相感じ気が通じ心が心を喚起し決して齟齬し扞格する者で無い」という戀愛觀を吐露している。「情婦」「情夫」とはいくまでもなく、前近代的な「色慾い」という男女関係を反映した言葉であり、それに対して、「愛」は、文三の吐露からうかがえるように、自由で主体的な男と女の平等の關係としての近代の戀愛觀念を反映させている。このような慎重な言葉の使い分けは、男女の關係を肉欲的な關係だけにとどめず、精神的な交際をより強調する当時の先覚者の考え方と一致するものである。

『浮雲』における近代的戀愛意識に對しては、佐伯順子が『愛』における他者の問題——明治小説を中心として——において、伝統的な「いろ」と近代的「愛」という立場から詳しく論じ、『浮雲』で文三とお勢は明治初期の近代的戀愛を試みたと分析している。¹⁰ただ、この作品で二人の主人公が作り出す戀愛は、その当時としてはごく稀で、また何人かの啓蒙家によつて提示されたばかりの近代的戀愛意識であつたといえよう。だからこそ、すでにふれたように、二人の戀愛關係は戀愛觀念の表出にとどまるだけで、それ以上の進展は見られず、モチーフは別の方に屈折してゆく。それは当時の啓蒙雑誌の言説と同じように、觀念としての「戀愛」は知つても、それをどう具体化してゆくのか、ということではいまだ模索の段階で、それ以上は深められなかったことを物語っている。

以上で考察したように、『浮雲』の文三とお勢は近代的な国民教育を通じて成長した人物であり、明治初期に新たに西欧から入った近代の戀愛意識の持ち主である。その二人の戀愛に西欧近代の「戀愛」を体現させようとしたところに、この作品の一つの意図があつたと思われる。ただその「戀愛」を小説として描き切ることではできなかったが、少なくとも明治初期小説の特色としての啓蒙性は、この二人の戀愛感情にだけは具現されていたといつてよからう。このような意味で、二葉亭が主人公の文三を「新主義」の人物として描こうとしたと述べているように、文三は、当時の近代的雰囲気先の先驅

的な体現者だといえるとともに、『浮雲』における新旧二つの世界は、このような背景の下に成立していると指摘することができる。

三 主人公のまなざし―救済物語へ向かつて

文三とお勢の恋愛、もしくは文三のお勢に向かう求愛の物語は、文三の免職や本田昇の登場、そしてお政の文三に対する態度の変化という要因、それに文三とお勢の立場の隙間が徐々に広がるといったようなことによってピリオドを迎える。しかし、お勢との関係の破綻以後、お政から冷遇されながらも、文三は自分を見捨てたお勢のために何かしなければならぬと思っている。すなわち、お勢を含んで園田家を救わねばならないという救済の物語が、第十六回以後から始まるのである。それは一面、小説の構成からすれば筋立の屈折といえるかもしれない。

このような救済の物語が始まるのは、何よりも文三のお勢に対するまなざしの急激な転換に起因している。

情欲の曇が取れて心の鏡が明かになり、睡入ッてゐた知恵は俄に眼を覚まして決然として断案を下し出す。（中略）が、過まッた文三は、—— 実に今迄はお勢を見謬まッてゐた。今となッて考へてみれば、お勢はさほど高潔でも無。移氣、開豁、輕躁、それを高潔と取違へて、意味も無い外部の美、それを内部のと混同して、愧かしいかな、文三はお勢に心を奪はれてゐた。（二二九—一三〇頁）

この叙述からわかるように、ここに至つてはじめて、文三はお勢を愛する価値のある対象として見なさないようになる。文三にとっては、このまなざしの転換こそ一つの新たな「認識の獲得」と受けとられた。この叙述に見られる文三の判断は、それほどにはなほだしい変化だといわざるを得ない。というのは、お勢を「清浄なもの、潔白なもの」、または「女豪の萌芽だ、見識も高尚で氣韻も高く、酒々落々として愛すべく尊ぶべき少女」と思い込んでいた文三のまなざしから見ると、この叙述にみえるお勢へのまなざしの変化はまるで対照的といつてもよいからである。このまなざしの転換によって、それまではお勢を「心変りをするやうな其様な浮薄な婦人ぢやアなし」と信じていた文三にとっては、お勢は求愛の対象ではなくなるのである。

このような文三の認識の転換は、そのままお勢を含め、園田家が現在墮落した不自然な状態に陥っているという認識につながるようになる。つまり、その墮落した園田家の現実を捉えるまなざしは、すでに引用した小説叙述、すなわち「今の家内の有様を見れば、最早以前のやうな和いだ所も無ければ、沈着いた所も無く、（中略）裸体にすれば、見るも汚しい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊で有る。」という箇所や、あるいは、

文三の既に得た所謂識認といふものをお勢が得てゐるとはどうしても見えない。軽躁と心附かねばこそ、身を軽躁に持崩しながら、それを憂しと思はぬ様子、醜態と認めねばこそ、身を不潔な境に処きながら、それを何とも思はぬ顔色。

（一一一頁）

という叙述からうかがうことができる。だとすれば、文三がお勢や園田の家庭を「自然に適わない」墮落した状態に陥っているという判断する理由はどこにあるのであろうか。

その墮落という判断は、「淫褻」「不潔」という言葉が暗示しているように、直接的にはお勢と本田昇の男女関係のありかたに起因するといえよう。というのは、文三がお勢に対して抱いた恋愛感情は、前節で考察したように、当時の言論界で議論されつつあった、清新で精神的な交際方式を背景にしていたのに反して、お勢と本田昇の交際は、たんなる肉欲的な戯れに終始していると、文三には見えただからである。文三はそのような男女関係を「淫褻」「不潔」と断じ、墮落とみなしたのであった。彼ら二人の付き合い方を文三が批判的に代弁する言説が、

圧制家、利己論者と口では呪ひながら、お勢もつゝ其不屈者と親しんで、弄ばれると知りつゝ、弄ばれ、調戲られると知りつゝ、調戲られている。けれど、さうはいふものの、戯けるも満更でも無いと見えて、偶々昇がお勢の望む通り、真面目にしてゐれば、さてどうも物足りぬ様子で、此方から、遠方から、危ふがりながら、ちよっかいを出してみる。（中略）総てなぶられても厭だが、なぶられぬも厭、どうしませう、といひたさうな様子。

（二三八―二九九頁）

という文章である。この二人の関係は最初から右の引用文に見られるようなありかたに沿って進んでいく。すなわち、お勢と本田昇は「其親しみ方が、文三の時とは、大きに違」つて、「両人とも顔を合はせれば、只戯ぶれる計り、落ち着い

て談話などした事更でない」といった関係が続いていく。この二組（過去と現在）の男女関係の差異は、恋愛を「愛」と呼んでいる文三の認識と、「色」と呼んでいる本田昇のそれとの距離をそのまま反映しているのである。つまり、この隔絶は、本田昇の肉欲的な交際と文三の精神的な交際の対立であり、前近代と近代の男女関係のありかたの差異ともいえるであろう。これは第十回で、文三が本田昇に「お勢を芸娼妓の如く弄ん」でいると指摘する場面や、そのような本田昇と「巫山戯^{ふざけ}」ているお勢を「実に淫らだ」と批判している場面を通じて、明らかにうかがうことができる。

このような対立するモチーフには、その当時、近代にふさわしい新たな男女交際のありようを追い求めていた啓蒙家たちの間で、頻繁に論議されていた問題がそのまま反映されている。その記事を見ると、男女の交際を「肉交」（肉体的交際）と「情交」（精神的交際）で類別し、「肉交」を以前の野蛮時代の交際方式であったとし、それゆえに、「情交」のほうを文明開化時代の望ましい男女交際として積極的に推し薦めていた。¹¹ その中でも、明治二十一年六月に出た『女学雑誌』の「男女交際論（第三）」には、「肉交とは素と夫婦の間にのみ行なはるべきもの」として、「夫婦ならざるの男女間に行はる、交際は、必ず情交ならざる可らず」と前提した上で、夫婦でない男女が肉体的な関係を結べば、「之を姦淫と云ひ、皆な之を嚴罰す」べきだと指摘している。さらに、「肉交」を「放蕩男子」と「下等女子」の肉欲関係と断じ、その行為を「禽獸」「淫乱の奴隸」「淫ら」「猥褻」「過ち」などと罵倒するのに対して、「情交」のほうは「高尚愉快なる靈の楽しみ」「潔白」「清浄」「高尚清潔の談話」「幸福」などというように、価値ある精神的営為と称賛し、「文明開化の男女」になろうとすれば「情交なるものに拠らざる可らざる」と強く主張している。その論調を小説化しようとしたのが『浮雲』であった。

文三は、以前お勢を「清浄なもの、潔白なもの」と信じて愛していたところからわかるように、明らかに、当時の言論界で模索されていた男女交際論を十分に反映している。だからこそ、文三の眼には、本田昇と「淫らな」雰囲気を醸し出すお勢が「醜態」「不潔」の状態に墮落したと捉えざるを得ないのである。また、文三が免職になって現実の経済的基盤を喪失するや、逸早く本田昇のほうに乗り換えさせてしまふといった、打算的で利己的な姿勢を見せ、そのためには、「娘の道心を絞殺そうとす」るお政や本田昇などが醸し出す園田家の雰囲気（そのなかには当然お勢も含まれる）も、「自然に適っていない」「汚はしい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊」というように、文三の眼には映るのであった。

ところで、園田家を墮落の巢窟と断ずるがごとき原因を作ったお勢の墮落、すなわち彼女と本田昇が肉欲関係を結ぶに至った事情には、一体どのような要因が潜んでいるのだろうか。第十六回で、文三は、今まで「お勢を見誤っていた」と

認識を改めるところで、お勢が自分を見捨てたのは、彼女の「氣質」に由来していると言及している。お勢はもとと「移氣、開豁、輕躁」な気性であり、物事の内面の真味までは味わえないまま、物事の表面的な現象から全てを判断し、彼方此方と気が散りやすいタイプの女性である、というように文三は理解している。その文三の理解のとおりのお勢は、本田昇との交際が始まると、「身を不潔な境に処きながら」様々の醜態を演ずるようになる。ここに至ってのお勢の姿は、以前文三から影響を受け、精神的戀愛觀に目覺めたようにみえたのも、ただの一時的な氣まぐれにすぎなかったことを見せてくれる。お勢にとって、明治初期に受容された西欧近代の思想と觀念は、表層的なものとして受けとめられたにすぎなかったともいえる。

文三の判断や小説叙述から判断すると、作品の後半部のお勢の墮落した状態は「故の吾を亡くして」、「理性の口を閉じ、認識の眼を眩ませて」、「本心が眠って」いるからである。文三は、このように思いこんでいるから、お勢を救う方法として「お勢の眠った本心」や「底の認識まで届かないお勢の眼」を「覺まさせなければならぬ」としばしば口にする。小説叙述や文三のいう「理性」「本心」「底の認識」というのは、近代西欧の「知」と通底するといえよう。この小説の構造にみえる新旧の対立というモチーフと照応させればそういうことになる。換言すれば、近代西欧の思想と觀念に開かれた「知」のありようともいえよう。したがって、文三の上記のような考え方がお勢を含めて、旧習になすむ園田家を救済するために有効にはたらかない側面はある。そのためかどうか、文三がお勢に自身の考えを直接言い聞かせようと決心しながら、それが有効であったかどうかからぬままに作品世界の幕が下りるのだ。それゆえ、お勢の墮落の原因は、狭くは近代的戀愛觀、広くは当時の新思想を十分にこなしていないお勢の認識の不足に起因することだといえよう。

ところで筋立がここまで展開したところで注目されるのは、文三がお勢の墮落を認識して以来、お勢に自身が認識したことを知らせて、正しく身心を立て直さねばならないという啓蒙意識である。その意識の表れがお勢の閉じられた理性を開き、眩ませられている認識の目をも覺まそうとする口調なのだ。前節で考察したように、文三がお勢と園田家が「汚らわしい私欲と淫欲」に満ちていると判断した基準は、当時の啓蒙家の思想の反映である。だからこそ、文三は「危い境を放心して」いるお勢を「今が浮沈の潮界、尤も大切な時」として受け止め、自分自身がお勢と園田家を迷妄から救おうとするのである。このような文三の啓蒙意識を表す今一つの事実は、文三だけが唯一正しい「認識」の持ち主であり、お勢よりも豊かで深い「学問」や「知識」を持っているゆえに、お勢を救う担い手になりうるという確信の言説である。越智

治雄は第二回の物語で「或一日お勢の何時になく眼鏡を外して頸巾取っているを怪むで文三が尋ねれば「それでも貴君が健康なものには却て害になると仰ったものヲ」という叙述を根拠にして、文三を「お勢のいわば啓蒙家でもある」と述べているが、この関係性は第三回の物語でも読み取ることができる。文三が散歩から帰宅した、ある日の夜、お勢が自身の部屋に誘う。文三がお勢一人っきりの部屋にはいることをためらっていると、お勢は「貴君にも似合はない……アノ何時か、気が弱くツチャア主義の実行は到底覚束ないと仰しやったのは何人だッけ」という箇所である。この箇所でもやはり、文三がお勢に対して新たな考え方を言い聞かせる啓蒙家的役割を果たしていることがわかる。

文三が免職される以前は、文三とお勢はともにこのような近代的(西洋的)恋愛観で自身を啓蒙しようとして自覚していた。だが、それを実践として受け入れなかったお勢は、本田昇とともに啓蒙的なまなざしからすれば、醜惡な旧習になすむ色恋いの世界に身を沈めていくのである。このような様子を眼にした文三がそのために確かに挫折しないわけがなからう。そこで文三は、みずからの「認識」を根底にお勢に対する恋愛感情を切り捨ててしまふのである。しかしその一方では、お勢に対する啓蒙家としての義務感から、お勢や園田家を見捨てて立ち去ることもできなかった。

人情の二字、此二字に縛られて文三は心ならずも尚ほ園田家に顔をしかめながら留っている

(一四五頁)

若しお勢の眼を覚ます者が必要なら、文三を描いて誰がならう?

と、かうお勢を見棄たさない計りでなく、見棄ては寧ろ義理に背くと思へば、凝性の文三ゆゑ、もウ余事は思つてゐられん、(中略)園田の家を去る気にもなれず、いまに六畳の小座蒲に氣を詰らして始終壁に對つて歎息のみしてゐるので。

(一四八頁)

文三は、当時の近代思想を啓蒙しようとした、当のお勢から見捨てられたにもかかわらず、それにまた、お政などの憎しみを甘受しながら、園田家に留まり続け、お勢の眠った眼を覚まし、正しく導く方法を懸命に探る。その理由として文三が根底にするものは、右の引用文が示しているように、人情と義理という観念であった。つまり、文三はそのような倫理とも感情ともつかない義務感のために、園田家の現在の醜惡な状態を傍観し、その家から立ち去ってしまうわけにはいかないのである。

この「人情」という観念は、日本の文化史においては、「男女の恋情」や「人の哀しみを知り、思いやり、それと共感的な関係にはいること」など、多様な意味を含蓄しているが、もともとは「人間性あるいは人の心」という広義の意味において使用されていた言葉である。¹⁴ それに対して、「義理」の倫理は、江戸時代以来、日本のあらゆる階層を網羅し、現実の社会を成り立たしめている基本的な人間関係の拠り所とされていた。この作品で、このような「人情」「義理」がもつ伝統的で前近代的な意味よりも、広義の意味で用いられているかもしれない。しかし、恋愛の物語が終わって、旧習にならずむ世界が立ち現れたにもかかわらず、文三がそこにとどまろうとするとき、文三の意識にも残る前近代的な感情や倫理が浮かび上がってきたのではなからうか。文三の内面におけるアンビバレンスな新旧の思想・感情を見据えようとするところに明治初期小説がかかえ込まねばならない過渡期の人間存在への洞察があったとみられるのである。

『浮雲』の後半部における救済物語とは、お勢と園田家が「汚らわしい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情」の状態に陥っているという文三の価値判断から始まっている。その判断の根底というのは、これまで考察してきたように、当時の啓蒙家によって唱えられた近代的（西欧的）な思想であり、倫理であった。文三という人物はその体現者であった。文三はお勢との破局を乗り越えて、再びお勢と園田家を前近代的迷蒙から救済するために、お勢の眼を覚まそうとするのである。このような意味で、救済物語は、文三のお勢に対する啓蒙という同時代的関心と深く結びついていた。だとすれば、この救済物語と、本稿で課題とする「浮雲」という題意¹⁵はどのように関わっているのだろうか。言い換えれば、「浮雲」の題意というのは何を指しているのだろうか。そこで次節では、「終わりの方は『浮雲』という題意を現わそうとした」という作者の言説を手がかりとして、題意のもつ象徴性を検討していこうと思う。

四 「浮雲」という題意のありよう

本作品における「浮雲」という題意を理解しようとするとき、テキストにおいて参考になりうる箇所は次の三個所である。まず一つは序文である。二つめは、『落葉のはきよせ 二籠め』の末尾にみえる「浮雲」のイメージが語られる箇所である。そして最後の、三つめは「作家苦心談」で、作家が直接「浮雲」という題意¹⁶に関して述べた言説である。この三個所の中で最も手がかりを与えてくれるのが序文である。「浮雲」の第一篇の序文には、

矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ来るとさくさ紛れ（中略）缺硯に朧の月の雫を受けて墨摺流す空のきはひ夕立の雨の一しきりさら／＼さつと書流せばアラ無情始末にゆかぬ浮雲めが艶しき月の面影を思ひ懸なく閉籠て黒白も分かぬ烏夜玉のやみらみつちやな小説が出来しぞやと我ながら肝を潰して此書の巻端に序するものは

（第一篇のはしがき、四頁）

という叙述がみえる。ここで関心を惹くのは「浮雲」という言葉の使い方である。

この作品が創作された当時、「浮雲」という言葉は、前近代の漢詩および和歌の伝統を受け継いでいて、〈不安定なもの〉の比喻で使われた。そのためであろうか、大部分の先行論でも、この〈浮雲〉という用例も〈不安定なものの特徴〉として解釈している。しかしながら、少なくともこの序文の用例に限っていえば、これを当時の一般的な比喻である〈不安定なもの〉と意味づけるのには無理がある。というのは、ここでは〈不安定なもの〉というよりは、かえって〈艶かしい月の顔〉を遮るものとして喩えられているからである。のみならず、この「浮雲」は〈艶かしい月の顔〉を遮った結果として、「黒白も分かぬ烏夜玉のやみらみつちやな」現実の混迷を生み出す機能を果たしている。したがって、『浮雲』第一篇の序文における「浮雲」とは、望ましいものを遮る機能と、その結果として否定的な状況を生み出す機能を喻える言葉として用いられているといえよう。

一方、視野をさらに広げて「雲」という言葉まで考慮にいれば、本作品の中にみえる「雲」という言葉からも、実は序文の「浮雲」と同じような意味を読み取ることができる。まず、その典型的な場合が第十六回の「情慾の雲が取れて心の鏡が明かになり、睡入っていた智恵は俄に眼を覚まして決然として断案を下し出す。」という文章である。ここで〈曇った状態〉が象徴するイメージは、やはり望ましい状態を遮るものと把握できる。つまり、雲は心に喩えられる明らかな鏡を覆い隠し、人間が持っている智恵を麻痺させるといった否定的なニュアンスをもつて用いられている。それに、この文脈で面白いのは、〈曇っている状態〉が〈眠っている状態〉とほぼ同義的に用いられているところから、〈お勢の眠った本心〉も結局はお勢の心が曇っているためだと解釈しうるということである。

この用例のみならず、この作品全体を通じて、〈雲〉が表す意味は否定的な用法で使用されている場合がほとんどである。たとえば、「シカシ、（お勢に対する疑い…引用者注）散らして仕舞ひたいと思ふほど尚ほ散り難る。加之も時刻の移るに随って枝雲は出来る、砲車雲は広がる」という箇所でも、〈雲〉の役割は否定的な意味を表す文脈の中で用いられ

ている。この文章が出てくる第八回には、文三がお勢に対する信頼と疑いのほぎまで悩んでいたが、やがて疑いの心が益々深められる状態を「雲」に喩えているのである。この部分は少し後の「此最後の大笑で砲車雲は全く打払った」という文章と照応させてみれば、文三の心の中でお勢に対する信頼の感情を遮る疑いが次第に心を覆っていく意味を象徴している。

第一篇の序文を含め、本作品に用いられる「浮雲」、もしくは「雲」という言葉は、概してそのものの自体としてではなく、他の物との関係性の中で使われているのだが、それもすべてが否定的なイメージを生み出す比喩として用いられている。特に「浮雲」という「題意」の問題と結びつけて考慮すれば、序文にある「浮雲」は、決して伝統的な漢詩ないし歌語として用いられたものではないであろう。このような「浮雲」の題意を確かめるために、さらに次の文章に眼を配ってみよう。

境界は人を蝕るとかいへり、お勢酒に酔へるか如き心地なるべし 過ちのなきうちに醒まさるべからず 然らば誰か当に之を醒ますへき 従兄なり、親愛の友なり、文三をおきて誰かその任にあたるべき 義理の心に激せられてお勢を拯ふ謀を求むれとも益にもたぬ事は求めずとも心に浮へと確かなることは心に浮ばず 是に於て文三は我力お勢を拯ふ能はずとて歎けり（中略）お勢の心は取かへしかたし、波につられて沖へと出る船に似たり 文三の力之を如何ともしかたしといひて何事をもせずまたし得ず 是に於て平文三は不安に煩されたり そのさまは余か浮雲を読みたる情に同じ （『落葉のはきよせ 二籠め』）

この二葉亭の言説は、『浮雲』第三篇の発表とはほとんど同じ時期に書いた『落葉のはきよせ 二籠め』の末尾のところでも「浮雲」の作品内世界と「浮雲」のイメージを結びつけて語った部分である。明治三十年に二葉亭が「作家苦心談」で『浮雲』の後半部に「浮雲」という「題意」を描写しようとしたと述べているのは、彼にとって決して偶然に述べた言葉でなかった。

だとすれば、ここで「余」、つまり二葉亭が「浮雲」のイメージをどのように解釈しているのであるのか。引用箇所によれば、二葉亭が「浮雲」に読み取っている意味は、文三が不安に陥っている様子の比喩としてである。ここから、十川信介は「浮雲」の意味を「文三と二葉亭の不安な心理を、さらには、小説そのものの不安定な運命を象徴する」と言及しているわけである。もし十川信介の意見が正しいとすれば、二葉亭が「作家苦心談」で述べたことは、『浮雲』の中心思想

として終りの方は『浮雲』といふ題意、すなわち文三と作者の不安定な心理をあらわそう」としたという、論理的には矛盾したことになる。なぜかといへば、「浮雲の題意」というのは、「官僚制の批判」や「新旧の対立」といった主題から捉えることができるように、より作品内容と関わりを保っているねばならない性質のものだからである。それに、二葉亭の言説では文三が不安に陥っている心が『浮雲』のイメージを媒介にして二葉亭の心情が捉えられるところから、文三と二葉亭の心情は、同一の線上に位置しているといえる。したがって、『浮雲』のイメージとは、文三が陥っている不安と何らかのかたちで関係を持っているとみてよい。言い換えれば、文三が不安に陥っている様子」は『浮雲』を読み取る二葉亭の心情と同じ文脈として解釈できるから、ここで『浮雲』が指示する意味というのは、不安な文三の心理ではなく、かえって文三を苦悩させている対象のありようだといえる。

このような解釈からすれば、文三を苦悩させている対象というのは、第一に、お勢の「酒に酔へるか如きへ心地」であり、第二に、このお勢を「義理」という義務感に基づいて救おうとするが、それがうまくいかないために苦悩する自己の救済能力の限界である。ところで、お勢の「酒に酔へるか如き心地」とは、前で見たように「故の吾を亡くして」、「理性の口を閉じ、認識の眼を眩ませて」、「本心が眠って」いる状態である。だからこそ、文三は「お勢の眠った本心」や「底の認識まで届かないお勢の眼」を「覚まさないければならない」と言い続けながら、その方法を模索しつつも、見出せないでいるというのがこの小説の帰結であった。

ところが、これもすでに考察してみたように、お勢のこの状態は、お勢と園田家の醜惡な墮落の直接的な要因になっている。すなわち、

お勢は今甚だしく迷っている、豕を抱いて臭きを知らずとかで、境界の臭みに居ても、おそらくは、その臭味がわかるまい。今の心の状況を察するに、譬へば、酒に酔った如くで、氣は暴れていても、心は妙に眩んでいる
(二四六―一四七頁)

という叙述からわかるように、お勢は「今の心が酒に酔った如く、眩んで」いるために、現在の醜惡な姿を見せてしまったのである。そして、そのようなお勢の醜惡な姿がそのまま園田の家庭の「汚はしい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情の塊」となっているのである。この現実には「家内全体に生温い春風が吹渡ったように、総て穩に、和いで、落着いて、見る事聞

く事が尽く自然に適っていた」以前の園田家の様子から見れば、言うまでもなく墮落した状態なのである。

したがって、ここで「浮雲」が指している意味は、お勢の心が眩ませられている状態の比喩としてである。このお勢の状態は、以前の「自然に適っていた」幸福を遮って、お勢を含め園田の家庭の墮落を生み出していると文三の眼には見えた。確かに、第十六回でみた「曇った心」は、現在自覚しなかったお勢のことをよく表している。このような意味に、『浮雲』内の「浮雲」という言葉の役割や、二葉亭が別のところで使った「浮雲」に関する含意などを考慮に入れば、『浮雲』という題意は、この作品が書かれた当時の「危ない」という語彙的イメージと、晴れている状態を急に覆ってしまうという視覚的なイメージをふまえて、望ましいものを遮って現実の墮落をもたらすというイメージを生み出す装置として理解することができよう。

この作品においてお勢が自覚を持たない状態というのは、明らかに文明開化ということの真の意味を身をもって受け止めようとしないうまま、ただ皮相的な理解にとどまった結果といえよう。お勢は作品の前半部では、彼女こそ「新思想の真の理解者」だと文三に言わしめたが、現実としては、そこまでは至らなかったのである。このような明治期の近代化の過程のなかで、過渡的な状況に置かれていたといってもよい彼女の意識は、文三からすれば、まさに「閉じられた理性の口」であり、「眩ませられている認識の目」であったのである。だからこそ、作品内で唯一自覚した人物である文三は「危い境を放心して」いるお勢を、「今が浮沈の潮界、尤も大切な時」と再認識することで、あらためて啓蒙家としてお勢に立ち向かうとする。

このような作品構造からみると、〈浮雲〉という題意は、近代の理性と感情にまだ迷妄なままの園田家とお勢の世界をよく象徴しており、当時の社会状況を文明批判の立場から捉えようとする主題を表出するものと考えられているのである。作品中の救済物語は、このような批判意識を前提にして始められるのである。

五 むすび

『浮雲』第三篇の書き終わる頃、二葉亭は『落葉のはきよせ 二籠め』に小説のありようや、『浮雲』の創作における苦悩を日記というかたちで言及している。たとえば、次の文章がその当時の二葉亭四迷の考えをよく表している。

小説家は（中略）一枝の筆を執りて国民の氣質風俗志向を写し国家の大勢を描きまたは人間の生況を形容して学者も道德家も眼のとゞかぬ所に於て真理を探り出し以て自ら安心を求めかねて衆人の世渡の助ともなればあに可ならずや されば小説は瑣事にあらず 之をいやしといふは非なり

（『落葉のはきよせ 二籠め』）

この文章で二葉亭は、小説を創作する時に何を描写すべきかという、小説家の理想像を語っている。彼は小説を生の指標としての役割を果たすことができる、人生において非常に価値のある真剣なものとして位置付けようとしているのである。二葉亭が、小説とは何かということに関して、自己の考えを定立しようとする時期に書かれた『浮雲』の第三篇において、『浮雲という題意』を表わそうとしたことを見逃すべきではない。というのは、この第三篇に至って『浮雲という題意』を表現しようとする作家の主題意識が右の引用文と照応しているからである。

以上のように捉えられるとすれば、それによって、本作品で『官僚制の批判』や『新旧思想の対立』の後を受けて成立した『浮雲という題意』は、この第三篇に至って『浮雲』のストーリーが求愛物語から救済物語へと屈折した事情を説明するとともに、作品の後半部に位置する救済物語における『墮落した、望ましくない現実』を生み出した要因をも象徴している。

本作品の文三は、明治初期の西欧化の風潮にともなうて施行された近代的な学校制度の教育を通じて成長した人物である。そして文三は、当時ほんの一部の先覚者によって主張された新タイプの恋愛論（男女関係論）を自分なりに理解し、恋する相手であるお勢に向かう態度としてそれを内在化させる。しかしそれにもかかわらず、作品の後半部に至ると、これまで『新主義』を表層で演じてきたお勢は、その演技が皮相的な見せ掛けに過ぎなかったことを暴露するのである。この作品においては、この主題こそが『浮雲という題意』を象徴しているといえよう。

注

本稿に引用したテキストは、『二葉亭四迷全集 第一巻』（岩波書店、一九八一）の『浮雲』による。『浮雲』からの引用は、頁数のみを付すことにする。なお、引用文の中で、旧字体の漢字は新字体に改めた。

- (1) 二葉亭四迷「子が半生の懺悔」(『二葉亭四迷集第五卷』岩波書店、一九八二) 二六七頁
- (2) 二葉亭四迷「作家苦心談」(『二葉亭四迷集第五卷』岩波書店、一九八二) 一六二―一六三頁
- (3) 関良一「浮雲」考(関良一「考証と試論二葉亭・透谷」教育出版センター、一九九二) 三百九頁
この作品が書かれた当時には「浮雲」という言葉は「不安定」という意味と「危ない」という意味をも表していたが(『二葉亭四迷集』角川書店、一九七二)の四一九頁の畑有三の註釈参考)、『二葉亭』がこの一般的な意味として「浮雲」という題意」を附しようとしたかどうかはいまだ疑問の余地が残っているといえよう。
- (4) 越智治雄「浮雲のゆくえ」(日本文学研究資料刊行会編『坪内逍遙・二葉亭四迷』有精堂、一九七九) 二二〇頁
- (5) 十川信介「浮雲」の世界(十川信介『増補二葉亭四迷論』筑摩書房、一九八四) 一〇三頁
- (6) 日本近代教育史刊行会『日本近代教育史』講談社、一九七三) 六四頁
- (7) 当時、小学校における学齡児童の就学率は極めて低かった。のみならず、小学校に就学しても「半年から一年程度で学校をやめていくものが極めて多かった」という。「浮雲」の中で、文三が小学校を卒業する明治十年度の場合は、就学率は三九・八七%にとどまっているが、全体の中で最高年数である第一級年生の比率はわずか一・三%にしかならなかった。したがって、当時において、小学校の全課程を修学したというのは、当時の同年輩の青少年の中でも、ごく稀な場合に属すると言えよう。(日本近代教育史刊行会、前掲書五六―五七参考)
- (8) 『二葉亭四迷集』(角川書店)の四二九―四三〇頁の畑有三の註釈参考
- (9) 「男女交際論」(『女学雑誌』二六号、明治一九年六月一日)
- (10) 佐伯順子「愛」における他者の問題——明治小説を中心として(鶴田欣也編『日本文学における他者』新曜社、一九九四) 二二―一四一頁
- (11) 『女学雑誌』の「男女交際論」(第三三) (一一四号) という記事によれば、「情交」・「肉交」という言葉を初めて使用したのは『時事新報』だという。一方、「婦人の地位」(『女学雑誌』二二号) では、男女交際の三段階「色の時代」「癡の時代」「愛の時代」を提示しているが、「色の時代」は野蠻の時代に、「愛の時代」は「開化の時代」に該当すると述べている。
- (12) 「男女交際論」(第三三) (『女学雑誌』一一四号、明治二一年六月一六日)
- (13) 越智、前掲論文二二三頁
- (14) 源了圓「義理と人情」(中央公論社、一九七〇) 一八頁
- (15) 十川信介「浮雲」の運命——その悲劇性と喜劇性——(前掲書) 一四六頁